景清

世阿弥作

ヒメ　息女人丸
トモ　従者
シテ　悪七兵衛景清
ワキ　里人

地は　日向
季は　雑

ヒメ、トモ次第「消えぬ便も風なれば。〳〵。露の身いかになりぬらん。

ヒメ「是は鎌倉亀が江が谷に。人丸と申す女にて候。さても我父悪七兵衛景清は。平家の味方たるにより。源氏に憎まれ。日向の国宮崎とかやに流されて。年月を送り給ふなる。いまだ習はぬ道すがら。物うき事も旅のならひ。また父ゆゑと心づよく。

二人下歌「思寝の涙かたしく。草の枕露をそへて。いと滋き袂かな。

上歌「相模の国を立ちいでゝ。〳〵。誰にゆくへを遠江。げに遠き江に旅舟の。三河にわたす八橋の。雲井の都いつかさて。仮寝の夢に馴れて見ん。〳〵。

トモ詞「やう〳〵御急ぎ候ふほどに。是は早日向の国宮崎とかやに御着きにて候。こゝにて父御の御行方を御尋ねあらうずるにて候。

シテ「松門独り閉ぢて年月を送り。みづから清光を見ざ

れば。時の移るをも弁へず。暗々たる庵室に徒に眠り。衣寒暖に与へざれば。膚は髄骨と衰へたり。

地「とても世を。背くとならば墨にこそ。〳〵。染むべき袖のあさましや。やつれはてたる有様を。我だに憂しと思ふ身を。誰こそありて憐みの。憂きをとぶらふよしもなし。〳〵。

ヒメ「ふしぎやな是なる草の庵ふりて。誰住むべくも見えざるに。声めづらかに聞ゆるは。もし乞食のあ

りかゝと。軒端も遠くみえたるぞや。

シテ詞「秋きぬと目にはさやかに見えねども。風の音信いづちとも。

ヒメ「知らぬ迷ひのはかなさを。しばし休らふ宿もなし。

シテ詞「げに三界は所なしたゞ一空のみ。誰とかさして事問はん。又いづちとか答ふべき。

トモ詞「いかに此藁屋の内へ物問はう。

シテ「そも以何なるものぞ。

トモ「流され人の行方や知りてある。

シテ詞「流され人にとりても。名字をば何と申し候ふぞ。

トモ「平家の侍悪七兵衛景清と申し候。

シテ「げにさやうの人をば承り及びては候へども。本より盲目なれば見る事なし。さもあさましき御有様うけたまはり。そゞろにあはれを催すなり。くはしき事をばよそにて御尋ね候へ。

トモ「さては此あたりにては御座なげに候。是より奥へ

御出であつて尋ね申され候へ。

シテ詞「ふしぎやな只今の者をいかなる者ぞと存じて候へば。この盲目なるものゝ子にて候ふはいかに。我一年尾張の国熱田にて遊女と相馴れ一人の子をまうく。女子なれば何の用に立つべきぞと思ひ。鎌倉亀が江が谷の長に預けおきしが。馴れぬ親子を悲しみ。父に向つて言葉をかはす。

地「声をば聞けど面影を。見ぬ盲目ぞ悲しき。名のら

で過ぎし心こそ。なか〳〵親のきづなゝれ。〳〵。

トモ詞「いかに此あたりに里人のわたり候ふか。

ワキ詞「里人とは何の御用にて候ふぞ。

トモ「流され人の行方や御存じ候。

ワキ「流され人にとりても。いかやうなる人を御尋ね候ふぞ。

トモ「平家の侍悪七兵衛景清を尋ね申し候。

ワキ「只今こなたへ御出で候ふ山陰に。藁屋の候ふに人

は候はざりけるか。

トモ「其藁屋には盲目なる乞食こそ候ひつれ。

ワキ「なふその盲目なる乞食こそ。御尋ね候ふ景清候ふよ。あらふしぎや。景清のことを申して候へば。あれにましまず御事の。御愁傷のけしき見え給ひて候ふは。何と申したる御事にて候ふぞ。

トモ「御不審尤にて候。何をか包み申し候ふべき。是は景清の息女にてわたり候ふが。今一度父御に御対

面ありたきよし仰せられ候ひて。是まではるゞ〳〵御下向にて候。とてもの事に然るべきやうに仰せられ候ひて。景清に引き合せ申されて賜はり候へ。

ワキ「言語道断。さては景清の御息女にて御座候ふか。まづ御心を静めて聞しめされ候へ。景清は両眼しひまし〳〵て。せん方なさに髪をおろし。日向の勾当と名を附き給ひ。命をば旅人をたのみ。我ら如き者の憐みをもつて身命を御つぎ候ふが。昔に

引きかへたる御有様を恥ぢ申されて。御名のりなきと推量申して候。某たゞ今御供申し。景清と呼び申すべし。我名ならば答ふべし。其時御対面あつて。昔今の御物語候へこなたへわたり候へ。

ワキ詞「なふ〳〵景清の渡り候ふか。悪七兵衛景清のわたり候ふか。

シテ詞「かしまし〳〵さなきだに。古郷の者とて尋ねしを。此仕儀なれば身を恥ぢて。名のらで帰す悲しさ。

千行の悲涙袂を朽たし。万事は皆夢の内のあだし身なりと打ち覚めて。今は此世になき物と。思ひ切つたる乞食を。悪七兵衛景清なんどゝ。呼ばゝ此方が答ふべきか。其上我名は此国の。

地「日向とは日に向ふ。〳〵。向ひたる名をば呼び給はで。力なく捨てし梓弓。昔に帰るおのが名の。悪心は起さじと。思へども又腹立ちや。

シテ「所に住みながら。

地「所に住みながら。御扶持ある方々に。憎まれ申す者ならば。ひとへに盲の。杖を失ふに似たるべし。片輪なる身の癖として。腹あしくよしなき言事。唯ゆるしおはしませ。

シテ「目こそ闇けれど。

地「目こそ闇けれども。人の思はく。一言の内に知る者を。山は松風。すは雪よ。見ぬ花の。さむる夢の惜しさよ。さて又浦は荒磯に。よする波も聞

ゆるは。夕汐もさすやらん。さすがに我も平家なり。物語はじめて。御慰みを申さん。

シテ詞「いかに申し候。唯今はちと心にかゝる事の候ひて。短慮を申して候ふ御免あらうずるにて候。

ワキ詞「いや〳〵いつもの事にて候ふほどに苦しからず候。又我等より以前に。景清を尋ね申したる人はなく候ふか。

シテ「いや〳〵御尋ねより外に尋ねたる人はなく候。

ワキ「あら偽を仰せ候ふや。まさしう景清の御息女と仰せられ候ひて御尋ね候ひし物を。何とて御つゝみ候ふぞ。あまりに御痛はしさに是まで御供申して候。急いで父御に御対面候へ。

ヒメ「なふ自こそ是まで参りて候へ。恨めしやはるゞ〳〵の道すがら。雨風露霜を凌ぎて参りたる心ざしも。いたづらになる恨めしや。さては親の御慈悲も。子によりけるかや情なや。

シテ「今までは包みかくすと思ひしに。あらはれけるか露の身の。置きどころなや恥かしや。御身は花の姿にて。親子と名のり給ふならば。殊に我名もあらはるべしと。思ひ切りつゝ過すなり。我を恨みと思ふなよ。

下歌地「あはれげに古は。疎き人をも訪へかしとて。恨み譏る其むくいに。正しき子にだにも。訪はれじと思ふ悲しさよ。

上歌「一門の船の内。一門の船の内に。肩をならべ膝を組みて。所せく澄む月の。景清は誰よりも。御座船になくてかなふまじ。一類その以下。武略さまぐに多けれど。名を取楫の船に乗せ。主従隔てなかりしは。さも羨まれたりし身の。麒麟も老いぬれば。駑馬に劣るが如くなり。

ワキ詞「あら痛はしや先かう渡り候へ。いかに景清に申し候。御娘御の御所望の候。

シテ詞「何事にて候ふぞ。

ワキ「八島にて景清の御高名の様が聞しめされたきよし仰せられ候。そと御物語あつて聞かせ申され候へ。

シテ「是は何とやらん似合はぬ所望にて候へども。是まではるゞ〳〵来りたる心ざし。あまりに不便に候ふほどに。語つて聞せ候ふべし。此物語過ぎ候はゞ。かの者をやがて古郷へ帰して賜はり候へ。

ワキ「心得申し候。御物語すぎ候はゞ。やがて帰し申さ

うずるにて候。

シテカタリ「いで其頃は寿永三年三月下旬の事なりしに。平家は船源氏は陸。両陣を海岸に張つて。たがひに勝負を決せんと欲す。能登守教経のたまふやう。去年播磨の室山。備中の水島鵜越に至るまで。一度も味方の利なかつし事。ひとへに義経が謀いみじきに依つてなり。いかにもして九郎を討たん謀こそ有らまほしけれと宣へば。景清心に思ふやう。

判官なればとて鬼神にてもあらばこそ。命を捨てば安かりなんと思ひ。教経に最期の暇乞ひ。陸にあがれば源氏の兵。余すまじとて駆け向ふ。

地「景清是を見て。〳〵。物々しやと夕日影に。打物ひらめかいて。切つてかゝればこらへずして。刃向いたる兵は。四方へばつとぞ逃げにける。遁さじと。

シテ「さもうしや方々よ。

地「さもうしや方々よ。源平たがひに見る目も恥かし。一人を留めん事は案の打物。小脇にかいこんで。なにがしは平家の侍。悪七兵衛景清と。名のりかけ〳〵。手取にせんとて追うて行く。三保谷が着たりける。冑の鍬を。取りはづし取りはづし。二三度逃げのびたれども。思ふ敵なれば遁さじと。飛びかゝり冑をおつとり。えいやと引くほどに。鍬は切れて此方に留れば。主は先へ逃げの

びぬ。遥に隔てゝ立ち帰り。さるにても汝おそろしや。腕の強きと言ひければ。景清は三保の谷が。頸の骨こそ強けれと。笑ひて左右へのきにける。

「むかし忘れぬ物がたり。おとろへはてゝ心さへ。乱れけるぞや恥かしや。此世はとても幾ほどの。命のつらさ末近し。はや立ち帰り亡き跡を。弔ひ給へ盲目の。くらき所の灯。あしき道橋と頼むべし。さらばよ留る行くぞとの。只一声を聞き残す。

これぞ親子の形見なる。〳〵。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第三輯』大和田建樹 著